

京都大学オープンコースウェア 「人種概念の総合的理解」

2008年5月16日(金) 2限 リレー講義 担当 竹沢泰子
講義ノート @竹沢泰子
無断引用はお断りします。

北米における人種イデオロギー

はじめに

人種は、二大論争のうち、普遍ではなく、近代の産物であるという捉え方→
オードリー・スメドリー

1. 歴史が語るもの

- ・ 1619年にアフリカ人がヨーロッパ経由でバージニアの植民地に運ばれてきたとき
⇒初期のアフリカ人たちはヨーロッパから来た契約移民と同等の扱い
- ・ 初期における共生
社会階層という意味では社会の底辺
貧民層のなかではヒエラルキーは存在していなかった。
結婚もあり→底辺で生きる白人の人たちにとっては、皮膚の色をもとにして
区分や社会関係が作られていたということはなかった。個人的
に偏見を抱く人がいたかもしれないが、異人種間結婚も生じて
いた。
- ・ 1670年 過酷な労働条件→ラザニアル・ベーコンの反乱
貧しいものたちが団結して反乱
- ・ 農園主たちの関心
⇒いかに労働者をコントロールできるか
- ・ 当初から皮膚の色が問題とはならなかった。しかしマーカースとして皮膚の色
が使われるようになっていった。
⇒ネイティブ・アメリカ人→弱すぎる
アイルランド人→コントロールがきかない
アフリカ人 使いやすい→大量のアフリカ人を奴隷として使うように
→奴隷制へ

- 16 世期末 貧民層をいくつかの身分に区別→内部で団結しにくくする策略
 - ⇒身体的な差異を基調にしたマーカーとしてのアフリカ人
 - 最も身体的に識別しやすい、目立つ存在
 - プランテーションのオーナーとしては奴隷として扱いやすい
 - ⇒異教徒としてのアフリカ人
 - キリスト教でもカトリックでもない
 - アフリカ独自の信仰

*ジョーダン→イギリスにおいてもアイルランド人や黒人に対する偏見が根深い。その価値観がアメリカからヨーロッパにもちこまれた。

*スメドリー→ヨーロッパとの連続性を否定。社会的、政治的な状況から、たまたま皮膚の色というものが選り出されて、利用されたにすぎないと主張。

学生からのQ なぜ宗教が重要になるのか？

独立以前の多くの州で、プロテスタントであることが市民の条件。
合衆国の生い立ちからいって、特に初期はプロテスタントであることが、コミュニティのアイデンティティ維持において重要な部分であった。
宗教>皮膚の色
しかし独立直後の帰化法の制定時、南部の議員の圧力により、宗教ではなく、皮膚の色が帰化の条件になった。

2. ビデオ “Race- The Power of Illusion” の解説

Episode 2: The Story We Tell

- ヨーロッパからの移民の流入
 - かつてのアイルランド人は奴隷に近い契約農民として扱われた。ホワイト・ニガーと呼ばれるほど社会の底辺におかれていた。
 - あまりにも過酷な労働条件を提示すると反乱がおこる可能性。
- 黒人が奴隷として定着しはじめると、白人の農民の地位が黒人よりも向上していった。たとえば奴隷の監督という地位に。それにともない「ホワイト」としての意識。アングロサクソンのみを指す狭義の「ホワイト」の概念が広がりをもつようになった。白人と黒人との間の距離も広がる。

⇒差異の自然化

差異だと見なされるものが、「生まれながら」のものに

・トマス・ジェファークソン

アメリカの平等を謳うことに疑問をいだかなかったのは、黒人を人間ではないと考えていたから。それゆえに、一方では奴隷を多く雇う生活をしていても矛盾を感じなかった。

インディアン

⇒自分たちとおなじ、ヨーロッパ人種と変わらない。

文明化すれば白人と同じようになる、異なるのは文明の程度→教育によって変えることができる。ヨーロッパ人に同化させることにより、インディアンがもつ資源もヨーロッパ人が支配できるという目論見。

黒人

⇒教育では変えられない。環境の結果ではなく、遺伝的なものだとした。

そして、科学にその説明を求めた→人種理論の利用（「白人よりも劣等」）

・チェロキー

tribe（族）と呼ばれた人々は、やむをえず、キリスト教に改宗したり、英語とチェロキー語のバイリンガル教育を受け、同化していった。

- ・開拓が進むにつれて、白人たちがチェロキーの土地に住むようになり、徐々にその土地を所有するようになる。

↓

資源を求めて西部を開拓するなかで、黒人だけではなく、インディアンも劣つたものとされ、科学的にその説明が求められるようになった。

- ・奴隷制をめぐる 19 世紀末ごろから議論が高まる。

奴隷制反対論者→神は人間を平等に作ったと主張。

奴隷制擁護論者→彼らは保護しなければ自立できない存在、奴隷として養うことが彼らにとっての幸せであると主張。

・19 世紀中葉 ルイ・アガシ

すべての人間は平等なのか？

黒人は神の意志によって劣等なものにつくられたのか？

単一起源論 vs. 多起源論

*単一起源を信じていたアガシは、サミュエル・ジョージ・モートンの研究に出会い、脳の容量に差があるという結果に触れ、「人間はすべて平等につくられている」というアガシの信条は崩された。

⇒しかし、それは意図的な過ち、偏見のある過ち、人種の違いが存在するかのような測りまちがいであったとの指摘がある。数字でヒエラルキーが出てくるように意図的な操作がなされていた。(スティーブン・J・グールド『人間の測りまちがい』)

↓

19世紀中ごろから後半にかけて、計測法発達。モートンら、サンプル操作など(例：白人には男性を多く、頭の小さいインド人は除外、北欧人を含める。黒人には女性を多く、世界一慎重の小さいピグミーなどを含める。ちなみに女性は平均的に脳の容量は男性より少ないが、身長に比すると男性より比率が高い)

⇒骨の長さや脳の大きさなどが気質、能力に結び付けられたところが、人種概念の特徴。

・なぜ奴隷制？

神様が彼らを奴隷として作った

↓

科学という名のもとに、黒人がもともと劣っているという主張、偏見が広まった。類人猿と黒人を並べて絵を描くなど頻繁になされた。

→モートンは多起源論を信奉する奴隷制支持者であった。

「神の意志によって奴隷としてデザインされた黒人」

・科学者自身が自分たちの抱く偏見に盲目。また政治的な要請などのプレッシャーによって、そのような方向性に誘導された可能性もある。